

## アニメで知る心の世界

こもれ心の診療所 羅田 享

今回扱うアニメ作品：天気の子 8回目

### 空想と反逆とエディプスコンプレックス

今回のテーマ

I. 空想と現実の狭間で生きる登場人物

II. 「ハレ」と「ケ」から天気を読み解く←この途中までやってきた

III. 警察官とエディプスコンプレックス

前回までのまとめ

帆高と陽菜が出会い晴れビジネスを展開するまで

『天気の子』の主人公森島帆高は島の生活に息苦しさを感、そこから抜け出すように

東京へと一人逃げ出すように上京した。雨が終日降りしきる東京。そんな中で天気を晴れにできるという「晴れ女」の特殊な能力を持った陽菜と出会う。彼女と行動を共にし、どうしてもその時、その場所だけはスポット的に晴れにしてほしい人に晴れを提供するという「晴れビジネス」というものを展開していく。

森島帆高の突飛な上京はエディプス・コンプレックスからの逃避であるが、一方で陽菜も最近母を亡くし、経済的基盤を失い、弟の凧との子どもだけの生活を強いられているが、その喪失を否認し、明るく生きようとしている。二人は互いにとって希望の光（「ハレ」）の存在となり、このビジネスは表面的には問題解決への取り組みに見えるが、実際には陽菜が母の喪失という根本的な痛みと向き合うことを避け、周囲の期待に応えることで自分の存在価値を確認しようとする、自分自身を犠牲にした適応だったとも言える。

## 晴れビジネスの限界

その後「晴れ女」の秘密を陽菜は帆高に語る。

陽菜は、母を失うかもしれないという耐え難い現実と直面した時、鳥居（境界）を越えて「死の世界」に片足を踏み入れることで、生者として感じるべき痛みから逃れ、「感情的な死」を選んだとも言える。晴れ女として万能的な存在となった陽菜だが、天気を支配することで、**外界の全能的コントロール**を試みている。これは躁的防衛の典型的な特徴で、内的な痛みや混乱に対処するために、外界を思い通りに操ろうとする試みである。陽菜の場合、家族を失った喪失感や生活の困難といった耐え難い現実に対して、天気という自然現象すら支配できるという万能感で対抗しようとしているとも解釈できる。

陽菜は自分の内的な苦痛や不安と真に向き合うことを避け、代わりに「晴れビジネス」をすることで、外界への働きかけに没頭する。これが「内なる現実の人々を生きのまま仮死状態にしておく」ことに通じている。そして晴れ女としての力を得ることで、一時的には全能感を味わえるが、それは同時に生の世界から少しずつ離れていくプロセスでもあり、最終的に彼女が「消える」危険性へと発展していく。それは「君の名は。」で三葉が糸守町の消滅とともに亡くなったこととリンクする。そして両者に共通するのは自身の自我の喪失である。

陽菜は帆高に出会うまで、上記のように自分自身の中で死を意識していたように感じられる。しかしこのように陽菜が自分の秘密を語ったということは、陽菜自身が「消える」

危険性がある今、生きたいという思いが強くなり、それ故にどうにかしたいと帆高に打ち明けているように感じられる。

陽菜を助け出すには、前述の「君の名は。」で瀧が深く三葉の内面に入り込む中で三葉を救い出したように、帆高が陽菜を愛し、彼女の苦悩を受け止め、彼女を救い出すことが必要不可欠である。ある意味、凧が帆高に陽菜の誕生日プレゼントに指輪（一般的に永遠の絆、約束の象徴）を提案したのは無意識に陽菜を救い出してほしいと思ったために発した言葉ようにも感じられる。

そのように帆高との深い交流を通じて陽菜自身が等身大の自分と向き合い、彼女の自我が形成されていくことが今後の陽菜の生き方には必要不可欠と考えられる。

### 警察の介入と逃避行

その後、陽菜の家に刑事と女性警官が訪れ、帆高がいないかと事情聴取される。そしてここには保護者がおらず、子ども達だけで生活しているのは問題だと指摘され、後日児童相談所の介入が入ることとなり、これまでの生活が大人達によって壊されることになってしまう。警官は父の象徴であり、超自我対象である。ある意味、彼らは帆高達にこれまでの夢の出来事から別れを告げ、現実と向き合えと言っているように感じられる。

しかし帆高達3人は逃避行をすることし、途中警官に見つかってしまう。どうにか命からがら逃げ切って、どうにかたどり着いたラブホテルで、3人は童心に戻って騒ぎまくるが、そのから騒ぎも束の間であり、長くは続かなかった。

### 陽菜が消えるということ

その後、0時を過ぎて、陽菜が18歳の誕生日になった時に陽菜は透明になり、消えようとしている。それは自我を持たないために、大人になれず消失していくことを意味しているようにも感じられる。

この時点で、陽菜は自分自身が消失していく（いわば自我の消失）ことを受け入れようとしているように感じられる。一方で帆高はそのことを自分のことのように嘆き悲しみ、なんとかこの状況を避けようと必死にもがいている。その二人の様子が対照的である。陽菜は何か悟っているかのようであるが、帆高は嘆き悲しみ、必死にどうにかしようともがいている。しかしこの帆高の思いも陽菜も思いであり、帆高の思いは陽菜自身の受け入れられない（彼女の悟りの裏側にある悲しみ）感情の投影のように感じられる。

そして帆高はその陽菜の投影を受けとり、なんとかしようとしている。そこに帆高自身の心の成長が感じられる。この会話の中で帆高は、これまでになく、陽菜という存在が自

分にとってかけがえのない存在であり、一緒に生活を築き上げていこうという強い主体性を感じる。

そしてその後、帆高と陽菜が見た夢が非常に意義深い。帆高は夢の中で「この場所から出たくて、あの光に入りたくて」と言っていたように、帆高は、エディプス葛藤に押しつぶされ、今ある状況から逃げ出し、大人のように自立した生活を望むが、孤独や不安を抱え、主体的になれないでいた。そこで陽菜に出会い、愛すべき対象を見出し始めたが、夢が途中で終わってしまったということは、それはまだ道半ばということの意味しているのだろう。

ここから帆高が陽菜を助け出す話へと展開していくが、ここが『君の名は。』で三葉の住む糸守町が隕石の落下で消滅し、そのことを知った瀧が、三葉を救い出すために宮水神社の御神体へと一人で向かう展開と似ているものを感じる。

その後、刑事がそのホテルに乗り込み凧は児童相談所に帆高は警察署に送られることになる。しかし帆高は警察署から逃げ出し、逃走劇を繰り広げていく。

### 警察の保護 そして 逃走の意味

警察は、先に述べたように父親の象徴の側面があり、警察の保護は、帆高自身がまだ大人になりきれておらず、未熟な存在であり、無力感を象徴しており、現実から目を背け必死に逃げようとする帆高に対して、警官たちは目覚めて向き合えと言っているようにも感じられる。それと同時に思春期におけるさまざまな喪失への無理解への怒りを象徴しているように感じられる。

一方で帆高にとって陽菜がいなくなるということは希望の光が失われたことを意味する。そしてそれはある意味、現実に向かうための移行対象を失ってしまったことでもある。大人たちは、その喪失を全く理解できていない。それはライナスにとって唯一無二の大事な毛布が、ポロボロの汚らしい毛布としか思えないのと同じである。

だから必死に陽菜の姿を追い求める理由のわからない警察達は、自分達のルールをことごとく壊し、逃げていく帆高にただ怒りを感じ、彼らは自分の職務をすることに命をかけ、帆高を必死に捕まえようとする。そこに帆高と大人達、言うなれば子供と大人の心の断絶が生じているのである。

そうして帆高は警察の追手から逃れて陽菜が晴れ女になったという代々木の廃ビルへと

向かっていく。そしてそこに辿り着いたときに待っていたのが須賀圭介である。

### 須賀圭介と対峙すること

ようやく辿り着いた帆高だが、そこに待ち構えていたのは、これまで東京での生活を援助してくれた須賀圭介であった。しかし須賀は帆高の思いを理解する子供側の立場ではなく、警察と同様に大人の立場で帆高に接していた。

そのときの須賀は帆高の考えを子供っぽい幻想と切り捨て、帆高に現実に向き合い、なにか諦めさせようとする大人の発言ではあるが、まるで須賀自身に言い聞かせているようにも聞こえる。須賀にとっての現実とは、妻の死という喪失が受け入れられず、娘にも会えない、いわば前に進めない諦めの生活である。しかし帆高はそれに決して屈せず、殴られても怯まず、銃の引き金を引いてまで自分の意志を突き通そうとする。

帆高の強い意志は、最終的に須賀を突き動かした。リーゼントの刑事に帆高が連行されそうになったとき、須賀は怒りを露わにし、刑事を突き飛ばし、帆高が陽菜を助け出そうとすることに手助けする。これは、帆高の決意に須賀が心を打たれたが故に手を貸した行動ととらえられる。

### 陽菜を助け出すということ

このシーンで帆高が鳥居をくぐるシーンは「君の名は。」のある主人公の瀧が起こしたあるシーンを思い出す。

それは、三葉が暮らしていた糸守町が隕石の衝突で消滅してしまったことにショックを受けた瀧は三葉になった時の記憶の糸を辿り、宮水の御神体が奉られている「彼の地」に向かい、川を渡り、洞穴の中に入り、口神酒を飲み、夢をみる、そのシーンである。川を渡る前に瀧が「ここから先はあの世」と言った様に、瀧は三葉を生き返らせるために三途の川を渡り、黄泉の国に向かう思いで洞穴に向かった。このことは以前このアニメをこの番組で取り上げたときに考察している。

帆高は鳥居を指して「あそこから彼岸（ひがん）に行ける!」と言ったが、「君の名は。」の瀧と同じように帆高も黄泉の国にむかう思いで天に登り、陽菜を助け出そうとしたのだと考えられる。小説版でも新海誠は次のように述べている「雲の上のこの草原は、彼岸だ。僕らがいてはいけない世界だ。ここは死者の世界だ。」

そして帆高は天に昇り、陽菜を助けに行く

## 【考察】

このシーンで帆高は天に昇って陽菜を助け出すが、これまでの帆高とは異なり、強い意志を持った一人の青年として陽菜と向き合っている。ここでは帆高と陽菜の関係性に明確な変化が見られる。それまでは帆高が陽菜に守られ、導かれる立場であったが、このシーンでは逆に帆高が陽菜を導こうとしている。

小説版において、新海誠は帆高のセリフとして「僕は決めている。他のことなんてどうだっていい。神さまにだって僕は逆らう。言うべきことはもう分かっている」という言葉を記している。これは天気の巫女が人柱となるという言い伝えへの反逆を示すものであり、帆高がこれまで従順に守ってきた価値観を打ち破る瞬間、すなわちエディプス・コンプレックスとの対峙を表している。

それに加えて、前回、現実からいなくなり彼岸に行った陽菜を帆高が救い出すということは、喪失の否認であり、いわゆる躁的防衛ではないか？という疑問が生じる。そこでエヴァンゲリオン新劇場版：破（以下「エヴァ破」と略す）の最終場面と前回比較して考えてみた。確かに「エヴァ破」のシンジのように、帆高の行動は躁的な心に突き動かされている。一般的に思春期ならびに青年期の心性として、思考する代わりに行動することが彼らのモットーであり、若さの証ともとらえられる。

「エヴァ破」のシンジと帆高との大きな違いは、帆高は陽菜を社会の人柱のような役回りで消滅していく生き方から救い出し、陽菜を生き返らせることで、彼女が社会の中で主体的に立ち振る舞っていくことを促している点である。

## IV. エピローグ

その後、帆高は警察に逮捕され、保護観察処分となり、地元に戻り、再び以前のような高校生活に戻った。高校卒業後、帆高は大学進学を機に再び東京に戻る。そして陽菜に会いに行く。

最後に陽菜に出会うシーンを取り上げる

帆高：元々は海だった。

世界は最初から狂っていた。

この世界がこうなのは、だから誰のせいでもないんだ…って

そう伝えればいいのか

帆高：は…！！

そこで帆高は陽菜を見つけた。彼女は坂の上で、傘も差さず、両手を組んでいた。目をつむったまま、祈っていた。降りしきる雨の中で、陽菜さんは沈んだ街に向かい、なにかを祈っていた。それは清らかで神々（こうごう）しくもあった。

彼女の姿を見て、帆高は強く感じる。

帆高：違う、やっぱり違う。あのとき僕は、僕たちは、確かに世界を変えたんだ。僕は選んだんだ。あの人を、この世界を、ここで生きていくことを。

帆高：陽菜さん！！

陽菜：あっ…（感嘆とも歓喜ともつかぬように）帆高！！

帆高と陽菜は駆け寄り抱きつく

陽菜：帆高…どうしたの？大丈夫？

帆高：うん…陽菜さん…僕たちはきっと…大丈夫だ！！

### 【考察】

島に戻った帆高の日常は、2年半前の東京で起こした一連の激しい出来事が、あたかも「何事もなかったかのように」平穏に進み、その記憶さえも忘却の彼方へ押しやられそうになっていた。

しかし、帆高は陽菜を救うために世界を「晴れ」から連れ戻し、東京に永続的な雨をもたらした結果、多くの人々の生活を犠牲にしたという**罪責感**を抱き続ける。メラニー・クラインのいう「抑うつポジション」である。帆高は再び上京し、須賀や富美といった大人たちから「世界は元々狂っていた」という言葉をかけられる。それは一見、諦観の「仕方がなかったんだよ」という慰めに聞こえるが、帆高が世界と対峙してきた行動の**意味**を無効化しかねない。

帆高にとって、陽菜たちとの出会いや、主体的な行動で世界を動かしたという事実は、彼自身の**アイデンティティ**を形成する核となっていったと考えられる。だからこそ、高校卒業後に再び上京し、精神的に深く関わった陽菜との再会を求めたのだろう。

最後のシーンで、雨の中で静かに祈る陽菜の姿を見たとき、帆高は彼らの選択が単なる「世界を犠牲にした愛」ではなく、もっと深い次元の意味を持つことに気づいたと考える。

映画の前半では、帆高も陽菜も社会の周縁に位置する、いわば「保護されるべき」未成熟な存在であった。帆高は家出少年であり、陽菜は自分の体を犠牲にして他者のために働く「晴れ女」であった。しかし再会したときの陽菜は、もはや巫女のように自己犠牲に生きる「晴れ女」ではなく、雨の中でも自分自身として**未来と向き合う**主体的な存在となっている、彼女の祈りはそんな意味を込めていると帆高は感じたのではないだろうか。

帆高は、陽菜と共に物理的な天気だけでなく、世界との関わり方、**生き方そのものを根本的に変えた**のだと痛感する。だからこそ、帆高は「僕たちは、大丈夫だ」と断言できたと考えられる。

この言葉は、二人の精神的成熟と自立の象徴である。彼らはメラニー・クラインの理論でいう\*\*「抑うつポジション」\*\*を経験し、「エディプスコンプレックス」を乗り越え、自分たちの選択がもたらした世界の変化（永続的な雨）に対する責任を引き受け、それと共に生きていく覚悟を固めたと解釈できる。